

もていひついの町の町史①

十津川郷の移住団が、明治23年にトック原野に入植してから今年で120年。移住当時を知る人はもういませんが、その精神は親から子へ、子から孫へと脈々と受け継がれているはず。そんな想いから、新十津川で生まれ、新十津川で活躍し、そして新十津川の歴史を良く知る人物にインタビューを行いました。人の数だけ歴史がある。その格言が表すとおり、町史に載っていない秘話が次々に顔を出し、歴史の奥深さを感じました。

移居前 十津川郷での生活は？

曾祖父・由江よしえの代までは、土族の植田という姓を名乗っていた。十津川郷の小森村（現・大字小森）に代々住んでいた。

祖父・由雄よしおは次男だったから分家するわけだが、分家すると身分は平民になる。当時は、土族と平民とでは格差がものすごかった。そこで、田中家から土族の身分を買い取って、植田由雄は田中由雄になった。やがて祖父は、隣村の小原村（現・大字小原）に引っ越した。

その後、明治22年8月に大水害が発生する。

移住時の家族構成は？

祖父は、祖母と伯父と父・由忠よしただを連れて、一家4人で北海道に移住することにした。

十津川移住団の足取り(明治22年)

	地域	十津川出発	小樽到着
第1団	北十津川村 十津川花園村	10月18日	10月28日
第2団	西十津川村南部 中十津川村	10月23日 10月24日	11月5日
第3団	西十津川村の残り 南十津川村 東十津川村	10月24日 10月27日	11月6日

父は当時2歳だった。曾祖父母は十津川に残った。思うに、万が一のときに、子どもたちが北海道から引き上げて来られるようにとの考えがあったのだろうよ。

集団移住は明治22年10月18日から始まったが、小原は中十津川村であるから、第2団だった。

入植後は？

字下徳富下3号山2線の東南角地の当籤地とくせんち（地図①）に入った。新たな生活が始まったが、祖父は土地を見てがっかりした。沢から運ばれてきた石がゴロゴロしていて、開墾には適さない土地だったからだ。祖父はその土地を開墾するのを諦めた。

そして、その年の冬に、下4号川2線（地図②）に6町歩を手に入れた。祖父母は、翌春から下3号山2線から毎日往復5キロを通って開墾した。明治27年には、下6号川4線（地図③）に5町歩を手に入れ、家も建てた。

本来であれば、当籤地は10年後に検査を受け、合格して初めて入植者の私有地になる仕組みだったが、実際には売買が行われていたということに分かるだろう。



さて、問題は金だ。土地を買うにしても、家を建てるにしても、金がなければできません。実は、曾祖父はもともと小森村で酒造業を営んでいましたし、祖父について小原に移った後も、農業のかたわら紺屋（染物屋）を営んでいたそう。それで、しこたま金を持っていったんだ。

祖父は、生活が落ち着いた明治29年に曾祖父を小原から招き入れた。曾祖父は、新十津川に来ると金貸しを始めて、小銭を稼いでいた。同じころ北海道拓殖銀行（拓銀）が設立されているが、庶民が簡単に金を借りられるわけではなかったから、こうした地元の金貸しに頼ることが多々見られたそう。

お父さんは次男ですが、独立時はどうしたのですか？

祖父は下4号川2線の土地（地図②）を開墾するとき、将来家が建てることを見越して、タモの巨木を2本残しておいた。それを切り倒して、建築資材を取った。昔の人は賢いもんだと感心するよ。

父はその地に家を建てて分家し、私はその家で生まれ、ずっとそこに住んでいたわけだ。札幌に引っ越してくるにあたって壊してしまっただ。

当籤地…

トック原野を区画割して移住団に割り当てた未開の国有地。割り当ては、くじ引きで決められた。

弘明さんの現役時代について教えてください

昭和17年1月から兵隊として千葉県に出征し、3月には満州に移った。終戦後はシベリアに抑留されて、昭和22年5月によく新十津川に戻ってこられた。そして、入隊前に務めていた鉄道（小樽築港機関区）を退職して、家業の農家を継いだ。

いつから剣道の指導者になった？

忘れられないのは、昭和39年4月から新十津川農業高校の授業に剣道が取り入れられ

て、その講師にと強く願い望まれたことだ。さすがに家内と2人の農業の身で、返事はできなかったが、ついに押し切られて昭和44年まで、5年間勤めた。

昭和51年4月には、山口諭助役（後の第3代町長）から完成して間もない尚武館の守をしてほしいかと請われた。即答はできなかったが、半年ほどあれこれ考えた末に、引き受けることにした。はじめは、尚武館の隣にあった児童館の管理が表向きの仕事だったが、昭和54年から社会教育

指導員として、また平成2年からは生涯学習推進アドバイザーとして76歳まで勤めた。

その後、尚武館館長の役は後輩に譲ったものの、相談役として去年（88歳）まで指導にあたることになった。

開町100年で思い出に残ることは？

あのころは、道内の各町村でも100年を迎えるところであって、実ににぎやかな時代だった。100年の年もさることながら、準備作業が10年前から始まっていた。また、新聞、テレビ

などの報道関係者の来町も多く、変わったところでは大学教授や学生の姿もあった。

新十津川では、なんといつても「新十津川物語」につきるかな。あれは昭和52年ごろだったかな、作者の川村たかし先生が物語の第1巻を持って来町されたのは。以来10巻が完結するまで、毎年取材にいらしたんだ。そこで、新十津川郷土史研究会会長の平田角平さんと副会長の私が、川村先生に付きつ切りで、取材に協力させてもらったんだ。物語の完結後、川村先生が

梅花女子大学の学生を30人ほど連れてきたときもお世話をさせてもらった。それが縁で、今でも文通している人がいるんだよ。

未来に託したいメッセージはありますか？

あまり難しいことは分らないが、移住民3世として、また、母村に29回もお邪魔した身としては、大変難しい時代になっているが、いつまでも新十津川の名が残るように努力してほしいね。



田中 弘明（たなか ひろあき）

大正10年1月15日、新十津川村字下徳富に生まれる。十津川移住団の直系子孫3代目。55歳のとき、町に請われて尚武館の剣道師範となり、昨年まで若き剣士の育成に力を注いだ。社会教育指導員、生涯学習推進アドバイザー、体育指導委員長、郷土史研究会会長、文化財保護審議会委員長、開拓記念館運営委員、民生児童委員など、多数の公職を歴任。現在は、札幌市で次女夫婦と共に生活している。